科学の眼 No.401

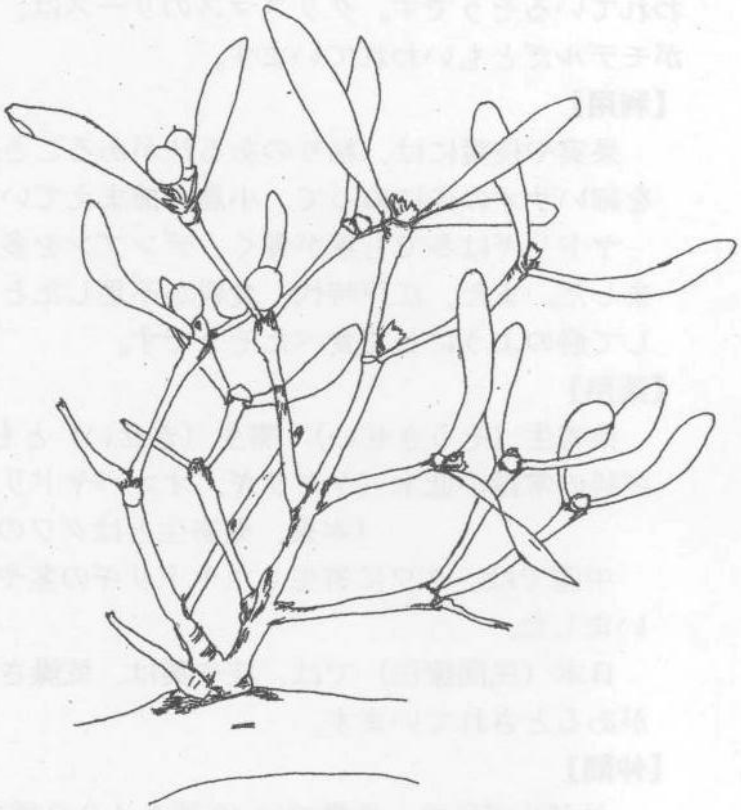
植物シリーズ

# 半寄生植物　ヤドリギ

Viscum Album

(Dec. 1, 2006)

ヤドリギは北海道、本州、四国、九州に広く分布し、朝鮮半島や中国北東部でも生育しています。寄生性の常緑樹で、エノキ・ブナ・サクラ・ケヤキ・ミズナラ・クリなどの落葉の広葉樹に寄生する高さ５０～８０㎝の常緑小低木です。



ケヤキ、クリ、エノキ、サクラなどが葉を落とす秋から冬にかけて、木の上のほうに、緑の枝や葉がからまり、鳥の巣のように見える大きなかたまりが目につくことがあります。このかたまりがヤドリギです。

茎は緑色で円柱形をし、二股か三股に枝分かれ、毎年一節ずつ成長し、高さ 30～80 センチくらいになります。

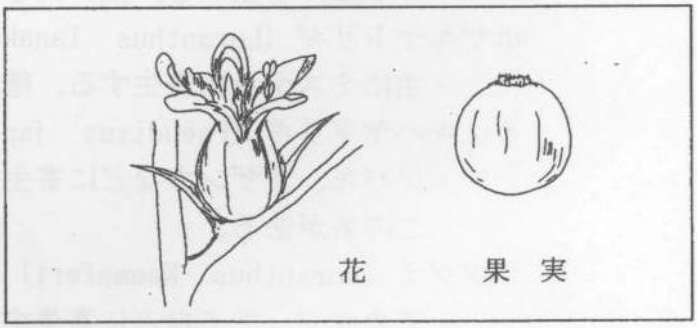
葉は対生し、長さ 2～8cm で、厚くて細長く、先は丸くなっています。

花は、２～３月に葉と葉の間に黄色く小さな花を咲かせます。雄花は３～５個、雌花は１～３個ずつつけます。

果実は直径６～８㎜の球形で、１０～１２月に淡黄色に熟します。雌雄異株で、結実している株と、全く結実していない株があります。

**【名前】**

ヤドリギは「宿り木」、「寄生木」と日本語で表記されています。名前の通り、樹木の幹に寄生して成長するからです。




寄主（きしゅ）が葉を落としても、青々としている事から、神が宿る依代（よりしろ）として、古代から神聖視されていました。ホヨ（寄生）、ホヤなどの古名があります。

他の種類の大木に寄生して、木から木へと飛び移り、絶対に地面に下りないことからトビヅタともいわれます。

大友家持の万葉歌

**あしひきの山の木末(こぬれ)の 寄生(ほよ)取りて**
**挿頭(かざ)しつらくは　千年寿(ちとせほ)くとそ**

学名のViscumはヤドリギを表す古いラテン語です。albumは「白い」という意味で、ヨーロッパ産のオウシュウヤドリギの果実が白色だったところからきています。

ヨーロッパでは、冬になっても枯れないということから不思議な力を持つと信じられ、クリスマスツリーの飾りにも使われているそうです。クリスマスのリースは、このヤドリギがモデルだともいわれています。

**半寄生植物**

ヤドリギは葉緑素を持っているので、光合成を行なうことができ、取りついた寄主(きしゅ)に伸ばした寄生根から、水分や無機塩類などを吸収し生活しています。このような形で生活する植物を、半寄生植物といいます。

**【利用】**

果実や枝葉には、粘りのある汁があることから、トリモチがつくられます。昔、これを細いサオの先にぬって、小鳥を捕まえていました。

ヤドリギは冬でも葉が青く、デンプンを多く含むので、家畜の肥料としても用いられました。また、江戸時代、食料が不足したとき、東北地方などでは、茎や葉をすりつぶして餅のようにして食べたそうです。

**【薬用】**

桑寄生（そうきせい）・寄生（きせい）ともよばれ、さまざまな樹木に寄生するヤドリギ科の常緑小低木（ヤドリギ，オオバヤドリギなど）の茎、葉を用いたものです。

（本来、桑寄生とはクワの大老木に寄生したものを指しています）

中国では、クワに寄生したヤドリギの茎や葉、果実を血圧降下や婦人病の薬として用いました。

日本（民間療法）では、枝や葉は、乾燥させて煎じて飲むと、血圧を下げ、利尿作用があるとされています。

**【仲間】**

ヤドリギ科は、世界では40属１４００種あるといわれています。

日本では次のようなものがあります。

アカミヤドリギ（Viscum Album var. rubro-aurantiacum）
・実がミカン色に熟す。

オオバヤドリギ（Loranthus Yadoriki）
・カシ類に寄生する。葉が大きい。

ホザキヤドリギ（Loranthus Tanakae）
・主にミズナラに寄生する。穂が垂れるところからこの名がある。

ヒノキバヤドリギ（Pseudixus japonicus）
・ツバキ、サザンカなどに寄生する。枝がヒノキの葉のようになることからこの名がある。

マツグミ（Loranthus Kaempferi）
・アカマツ、モミなどに寄生する。果実がグミの実のようである。

《姫路市立的形小学校教頭　小松保彦》

《671-2222　姫路市青山1470番地15　姫路科学館発行　079-267-3001》